The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高知県四万十市西土佐方言における準体助詞
Author(s)	野間, 純平
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2013, 11, p. 5-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24760
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 11 号（2013 年 3 月）5-14

高知県四万十市西土佐方言における準体助詞

野間　純平

【キーワード】西土佐方言、準体助詞、φ準体助詞、ノダ、接続助詞

【要旨】

本稿では、西土佐フィールドワークで行った準体助詞に関する調査結果の報告を行う。調査の結果、以下のことがわかった。

（a）西土佐方言の準体助詞は、「ガ」が用いられる。

（b）基本的に標準語の「ノ」とパラレルである。

（c）名詞に後接するモノ準体用法では、準体助詞が名詞に直接つく場合と、属格助詞を介してつく場合とがある。

（d）コト準体用法の一部とノニ用法にφ準体助詞が用いられる。

（e）ノニ用法では、コピュラが入った「ガジャニ」という形式もある。

1.　はじめに

本稿では、高知県四万十市西土佐フィールドワークで行った準体助詞調査の結果報告を行う。本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節では、本稿における「準体助詞」が指すものについて説明する。3 節ではインフォーマント情報について述べ、4 節で調査結果をまとめる。5 節はまとめである。

2.　本稿における「準体助詞」

一般的に準体助詞というと、体言に準じる、もしくは前接する要素を名詞化する助詞のことを言い、日本語学では次の下線部のようなものを指すことが多い。

（1）この本は私<u>の</u>だ。　　【モノ準体】

（2）私が買った<u>の</u>は机の上にある。　　【モノ準体】

（3）私が本を買った<u>の</u>を知っていますか。　　【コト準体】

（1）の「の」は「のもの」と置き換えられる「の」であり、属格助詞の「の」直後の名詞が省略されたものとして扱われることも多い。(2)は他の名詞の代わりになるものであり、代名詞として扱われたり、「代名詞的用法」とされたりする。（3）の「の」は特定の名詞の代わりをしているわけではなく、直前までの部分を名詞節としてまとめる機能を持っている。他の名詞に置き換えるとすると「こと」になるが、いつでも置き換えられるわけではない[1)]。以上のような「の」が、佐治（1969）などで準体助詞とされているものである。

1）　この点に関して、詳しくは橋本（1990）や坪本（1984）などを参照。

本稿では、上の例文の後ろの【　】内に示したように、(1)（2）のような代名詞的なもの[2]を「モノ準体」用法、(3）のようなものを「コト準体」用法と呼ぶ。そして、これらをまとめて「準体用法」と呼ぶ。この用法は、その名のとおり準体助詞の本来の用法であると言える。

しかし、この「の」は、様々なものと結びついて、次のような用いられ方をすることもある。

（4）私がこの本を買ったのだ。　【ノダ】
（5）本を買ったので、後で読もう。　【ノデ】
（6）本を買ったのに、忙しくてなかなか読めない。　【ノニ】

（4）はコピュラの「だ」と結びつき、いわゆるノダ文と呼ばれるもので、話し手の発話態度を表すモダリティ形式になっている。(5）と（6）はそれぞれ「で」と「に」が後接したもので、それらの助詞と 1 つになって接続助詞になっている。これらの「の」は、(1）(2）（3）のような、名詞として働く、もしくは名詞化するという準体助詞本来の機能からは離れているが、準体助詞から派生したものだとされる（山口 2000、彦坂 2006b など)。機能が本来の準体助詞とは異なるため、分けて考えるべきであるという山口（2000）の指摘もあるが、本調査では、どのような形式がどのような用法で用いられているかに注目したため、このようなものも対象に含めた。本稿では、(4）のような用法を「ノダ」用法とし、（5）のノデや（6）ノニをまとめて「接続助詞」用法とする[3]。

3.　インフォーマント情報

準体助詞の調査は、2011 年の 7 月と 9 月の 2 回に分けて行った。インフォーマントに関する情報は以下のとおり。いずれも大宮地区出身の人なので、今回調査したのは大宮方言ということになるが、本稿では単に西土佐方言と呼ぶ。

表 1 インフォーマント情報

話者ID	年齢	性別	居住歴	調査日
AFM	79	男性	0-79: 西土佐大宮	2011.7.16
AHM	74	男性	0-74: 西土佐大宮	2011.7.17
ADF	82	女性	0-82: 西土佐大宮	2011.7.16
AKM	72	男性	0-72: 西土佐大宮	2011.9.6
ALM	70	男性	0-15: 西土佐大宮　15-18: 中村* 18-70: 西土佐大宮	2011.9.6
ANF	65	女性	0-65: 西土佐大宮	2011.9.7

*中村は旧中村市（現四万十市）。

2）　前述したとおり、(1）の「の」は格助詞として扱われることもあるが、現代の標準語の場合は「の」が代名詞の両方の働きもしていると考えられる。
3）　ノニについては、本誌の「逆接表現」（pp.15-27）でも取り上げる。

4.　西土佐方言における準体助詞

本節は調査報告である。結論から言うと、大野（1983）や上野（1992）などの先行研究でも示されているように、高知県方言の準体助詞は基本的に「ガ」であり、今回の調査でもそれと大きな違いはなかったが、完全に標準語とパラレルというわけではなく、体系に多少の違いがあり、φ準体助詞（4.1.2 節と 4.3.2 節を参照）も残していることが明らかになった。以下では、2 節で示した枠に沿って、4.1 節で準体、4.2 節でノダ、4.3 節で接続助詞のそれぞれの用法について記述する。

4.1.　準体用法

準体助詞の準体用法においては、基本的に準体助詞「ガ」が用いられる。しかし、「ガ」の用いられ方が標準語の「ノ」と異なっているところもあり、準体助詞を使わずに表現するところもある。以下、モノ準体とコト準体に分けて述べる。

4.1.1.　モノ準体

西土佐方言の準体助詞のモノ準体用法においては、名詞に接続する場合とそれ以外に接続する場合とで準体助詞の振る舞いが異なるため、両者を分けて記述する。

4.1.1.1.　名詞に後接する場合

2 節における（1）に当たる、名詞に後接する「～のもの」相当の準体助詞は、西土佐方言には「ノガ」と「ガ」の 2 種類がある[4]。調査では「ノ」も回答されたが、これは標準語的な話し方をするときにしか使わないようなので、ここでは除外する。

（7）これはおれ｛ノガ／ガ｝ぞ[5]。

（8）この鍵は車｛ノガ／ガ｝ぞ。

この「ノガ」は、属格助詞の「ノ」と準体助詞の「ガ」に分けられる。

（9）これは車ノ鍵ぞ。

（10）これは車ノガぞ。

（9）の「ノ」は属格助詞であり、「鍵」という名詞が続いている。一方、（10）は（9）の「鍵」を「ガ」に置き換えたものと見ることができ、どちらにおいても「ノ」は属格助詞だと言える。つまり、（10）の「車ノガ」は、「車」に「ノガ」がついているのではなく、「車」に属格助詞「ノ」がついた「車ノ」に、準体助詞「ガ」ついているのだと言える。

しかし、(7) と (8) からわかるように、西土佐方言においては、属格助詞に準体助詞「ガ」がつくだけでなく、「おれガだ」のように、名詞に直接「ガ」がつくこともできる。この形は一見、標準語の「おれノだ」とパラレルであるように思えるが、西土佐方言の場合はそ

4）　以下、例文は漢字かな混じりで表記し、問題となる部分のみカタカナで表記する。

5）　西土佐方言においては、名詞述語文をコピュラ「ジャ（ヤ）」で言い終わることはあまりなく、「ゾ」や「ヨ」などの終助詞が名詞に直接つく（4.2.1.1 節でも後述する）。なお、この「ゾ」は、本誌の「行為指示表現」の報告（p.34）で述べられている「仮定形＋ドウゾ」の「ゾ」と同じものだと思われる。

のような分析をしない。なぜなら、西土佐方言の「ガ」は、次のように属格助詞としては使えないからである。

（11）おれ｛*ガ／ノ／*φ｝箸

（12）車｛*ガ／ノ／*φ｝鍵

冒頭の（1）のところでも触れたように、標準語では、このような「ノ」は、属格助詞に後接する名詞が省略されたものと分析できる。一方、西土佐方言の場合、（11）（12）に示したように、「ガ」は属格助詞としては使えない。したがって、西土佐方言の「ガ」は属格助詞ではなく、代名詞的な準体助詞であると言える。ただし、このような「ガ」は代名詞ではなく、いわば「属格助詞＋代名詞」といったところである。（11）（12）において、「*おれ箸」のような言い方ができないことからも、やはり属格助詞に当たるものは必要であることがわかる。

以上のことから、西土佐方言においては、「～のもの」に相当する言い方として、「名詞＋属格助詞」に準体助詞を後接させる方法と、名詞に直接準体助詞をつける方法があるということである。両者の意味的な違いについては、今回の調査では明らかになっていない。

4.1.1.2.　名詞以外に後接する場合

モノ準体用法で名詞以外の用言に後接する場合は、準体助詞「ガ」を用いる。「ノ」を使うこともあるが、主に女性が用いるもので、共通語的だという。また、「ン」を使うことはできない。

（13）昨日買った｛ガ／ノ／*ン｝が冷蔵庫にある。

（14）いちばん安い｛ガ／ノ／*ン｝でええ。

（15）こんな｛ガ／ノ／*ン｝が欲しい。

また、標準語にはない表現として、「そのガ」のように、「その」「この」といった指示形容詞に「ガ」を後接させることもできる。

（16）そのガじゃなくてこのガよ。

こういった「指示形容詞＋準体助詞」という表現については、（15）のような「こんな」「そんな」などの場合を除いて、先行研究ではあまり触れられていない。新潟県新津市古津方言を扱った大橋（1988:598）には、「共通語では、「コレ」とか「ソレ」とかと単純に指示代名詞で言うべきところを、当方言では、「コノガン」とか「ソノガン」とかと、物自体を押し出して言う言い方を習慣化している。」という記述がある[6)]。こういった表現は、全国方言を調査した大野（1983）の調査項目にもないが、同様の表現をする方言が他にもあるのではないかと考えられる。

4.1.2.　コト準体

西土佐方言においては、コト準体用法でも「ガ」が用いられるが、例外として準体助詞を介さない形、いわゆる「φ準体助詞」をとることがある。ここでは、「ガ」を用いる場合

6）ただし、西土佐方言の場合、「これ」「それ」といった言い方もする。「このガ」と「これ」の間に意味的な違いがあるかどうかは不明である。

とφ準体助詞を用いる場合に分けて記述する。

4.1.2.1.　ガを用いる場合

モノ準体用法と同様に、西土佐方言ではコト準体用法の場合も基本的に「ガ」を用いる。「ノ」を使うこともあるが、モノ準体用法の場合と同様に、標準語的で「上品」な印象があるという。ただし、「ノ」を使うことはあっても、「ン」は使わない。

（17）あの人は暑い｛ガ／ノ／*ン｝が苦手よ。

（18）荷物運ぶ｛ガ／ノ／*ン｝を手伝って。

4.1.2.2.　φ準体助詞を用いる場合

西土佐方言においては、準体用法を担う準体助詞は基本的に「ガ」なのだが、述語に準体助詞がつかず、そのまま格助詞などが接続する、つまりφ準体助詞[7]の表現を使う場合がある。それが、次のような「ニ」が後接する副詞節[8]である。φだけでなく「ガ」「ノ」も使える。

（19）車は買い物に行く｛φ／ガ／ノ／*ン｝に便利よ。

単に「ニ」が後接すればφ準体助詞が使えるというわけではなく、次のような場合は必ず準体助詞が必要となる。

（20）孫が急に結婚した｛*φ／ガ／ノ／*ン｝に驚いた。

この違いは、準体助詞によって形成された節が必須補語として働く名詞節か、副次補語として働く副詞節かという違いによるものである。すなわち、（20）のような必須補語となる場合、必ず準体助詞が必要となるが、（19）のように副次的な副詞節となる場合はφも可能となる。標準語では（19）のような場合でも準体助詞が必須だが、彦坂（2006a）でも述べられているように、φでも可能な方言は少なくない。

4.2.　ノダ

ここからは、平叙文と疑問文に分けてノダ文の記述を行っていく。当該方言では、準体用法の場合と同様に、ノダ用法においても基本的に準体助詞「ガ」を使用する。形態統語的な特徴も標準語の「ノダ」と基本的に同じで、平叙文と疑問文のどちらでも生起可能であり、後接するコピュラが活用することで、様々な形をとる。

4.2.1.　平叙文

当該方言のノダ文は平叙文において標準語のノダ文と同様の特徴を示すが、文末の言い切りの場合にはコピュラをあまり伴わないという特徴がある。そこで、言い切りの場合とそれ以外の場合に分けて記述する。

7）彦坂（2006a）では、「零準体助詞」と表記されている。

8）「ニ」が後接しているので名詞節とみなせるが、「ニ」を含めると、文の中で副詞的な働きをしていると言えるため、ここでは副詞節と呼んでいる。

4.2.1.1.　言い切りの場合

当該方言においてノダ文を作る準体助詞は、準体用法の場合と同様に「ガ」が基本である。そして、平叙文の場合コピュラを介さずに文末詞「ヨ」を後接させた「ガヨ」が最も自然に用いられるようである[9]。名詞、形容動詞述語の場合はコピュラの「ジャ」が「ナ」になり、そこに「ガ」が接続する[10]。

（21）病院に行ってきたガヨ。

（22）今日は孫が来とるガヨ。

（23）この人実は先生ナガヨ。

（24）この人は昔から丈夫ナガヨ。

標準語のようにコピュラを伴った「ガジャ」という形も使うようだが、「ガヨ」に比べてインフォーマントの内省がゆれる。これはおそらくノダ文の問題ではなくコピュラの問題だろう。高木（2002:150）は、「高知県幡多方言では、名詞・形容動詞語幹に直接文末詞が後接することが一般的で、断定辞が間に入ることは（非文ではないまでも）めったにないようである」と述べている[11]。野田（1997）などの多くの先行研究で言われていることだが、ノダ文は準体助詞によってその直前までの節を名詞化しているという点で、名詞文に準じるものである。したがって、名詞文におけるコピュラの使われ方は、ノダ文においてもほぼ同じだと言える。

そのため、西土佐方言におけるノダ文は、基本的に「ガ」＋文末詞であると言える。文末詞がつかない形も不適格ではないが、「ガ」単独だと疑問文と解釈されることが多いため、必ず何かしら文末詞をつけるようである。なお、当該方言において、名詞述語文も含めてコピュラを用いるか否かで意味が異なる可能性があるが、それについては今回の調査では明らかになっていない。今後の課題としたい。

4.2.1.2.　言い切り以外の場合

当該方言におけるノダが文末の言い切り以外で用いられる場合、後接するコピュラ「ジャ」が活用して、様々な形をとる。その形は基本的に標準語と同じであり、標準語で「ノ」あるいは「ン」となっているところが「ガ」になっているだけである。したがって、否定形は「ガジャナイ」となる。

（25）来とーて来たガジャナイ。

（26）おまえが悪いガジャナイ。

9）「ノヨ」「ンヨ」という語形も回答されたが、主に女性が使うもので、「伊予弁のような響き」という指摘もあった。

10）ただし、「ナガヨ」という語形については、こちらから語形を提示して誘導しても「言わない」という人もいた。これは、名詞述語文でない文を名詞述語文に準じる形にするというのがノダ文（の出自である準体助詞）の本来の働きであり、もともと名詞述語文である文をわざわざ名詞化する必要がないからであろう。当該方言において名詞述語のノダ文が不適格ということではなく、表現としてあまり自然ではないということだろう。（31）において「ナガジャッタ」の許容度が下がるのも同様の理由によると思われる。

11）高木の言う「幡多方言」は、筆者が調査を行った西土佐よりも南部に位置する宿毛市の方言を念頭に置いたものだが、今回のノダ文の調査では同様の傾向が見られた。

また、「ガトチガウ」という回答も得られた[12]。

（27）来たくて来たガトチガウゾ。

なお、標準語の「来たんじゃないんだ」のように、ノダを 1 つの文で 2 回使えるかどうかについては、インフォーマントによって内省が分かれたが、AKM と ALM は「ガジャナイガ」という形が可能だと答えた。

（28）来たくて来たガジャナイガネヤ[13]。　　【AKM】

（29）来たくて来たガジャナイガゾエ。　　【ALM】

過去形は「ガジャッタ」、推量形は「ガジャロー」という形をそれぞれとる。

（30）そうじゃ、今日は役場に行く｛ガジャッタ／ンジャッタ｝。

（31）そういえば今日は休み｛?ナガジャッタ／ジャッタ｝。

（32）（パラパラと音がする）雨降りよるガジャロー。

また、「ケド」節や「ケン」（標準語の「から」に相当）節などに生起しうる。

（33）時間がないガジャケン、はよせんか。

（34）今から買い物に行くガジャケド、何か買うもんあるか？

4.2.2.　疑問文

疑問文においても、基本的に「ガ」を用いる。Yes-No 疑問文でも、WH 疑問文でも、コピュラ「ジャ」は使わず、「ガ」が単独で用いられるが、前者の場合は「カ」が、後者の場合は「ゾ」がそれぞれ後接することもある。

（35）体調でも悪いガ｛φ／カ｝？

（36）どこに行くガ？

（37）どこに行くガゾ？　　【AKM, ALM】

ただし、WH 疑問文における「ゾ」が使えるかどうかは、インフォーマントによって異なる。今回の調査で「ガゾ」が使えると回答したのは、AKM と ALM の 2 人のみだった。

4.3.　接続助詞

西土佐方言におけるノデとノニは、これまでに述べた用法と同様、準体助詞「ガ」を用いたものが多い。しかし、ノニに関しては少し事情が異なり、標準語の「ノニ」をそのまま当該方言の語形に置き換えた形式以外のものも存在する。以下、ノデとノニに分けてみていく。

4.3.1.　ノデ

西土佐方言のノデは、標準語と同じく、準体助詞＋「デ」という構成になっており、「ガ

12）この「トチガウ」は標準語の「と違う」に置き換えにくく、語彙的な「違う」ではなく、大阪方言でも用いられる「チガウ」（高木 2009）と同じで、「本当は、いちごは果物トチガウ」のように否定形式として用いられているものと考えられる。ただ、否定形式としての「トチガウ」が西土佐方言においてどの程度使用されるかは未調査である。

13）この「ネヤ」という形式は、AKM が「大宮でよく使う言いまわし」として何度か繰り返していた。

デ」という形式になる。

（38）洗剤がなくなったガデ、買いに行ってくる。

（39）雨が降ったガデ、運動会は中止になった。

ただ、「ガデ」はあまり使用されないようである。形として言えないことはないが、それほど自然ではないという。これは、西土佐方言の準体助詞「ガ」が、ノデの用法を十分には持つにはいたっていないということだろう。

なお、名詞述語の場合は、ノダ文の場合と同様、コピュラが「ナ」になって「ナガデ」という形式が予想されるが、この形式を適格と回答したインフォーマントはいなかった。

（40）今日は休み｛*ナガデ／ジャケン｝、家でゆっくりしよう。

これは、4.2.1.1 節の（23）において「名詞＋ナガヨ」の内省がインフォーマントによってゆれたこととも関係すると思われる。

4.3.2. ノニ

ノニについても、「ガデ」と同様に「ガニ」という形式が使える。しかし、他の形式も存在する。以下のような「ニ」「ノニ[14]」「ガジャニ」がそれである。

（41）あの人はあんなに食べるニ、痩せちょる。

（42）合格できると思っていたガニ、いかざった。

（43）あんなに家が近かったガジャニ、いつも遅刻しちょった。

（44）せっかく木を植えたノニ、枯れてしもた。

いずれの形式にも「ニ」が含まれることから、「｛φ／ガ／ガジャ／ノ｝＋ニ」とまとめることができる。以下、それぞれについて説明していく。なお、どの形式がどの例文で使えないかという判断は、インフォーマントによって異なり、そこには特に傾向が見られなかった。したがって、ここではそれぞれの形式の意味的な違いについては触れず、形式的な特徴について述べるものとする[15]。

（41）の「ニ」は、「ニ」の前に準体助詞がつかない形、「φ準体助詞」による表現であると言える。これまで述べてきたように、西土佐方言では基本的に準体助詞「ガ」を用いた表現をする。しかし、4.1.2.2 で述べた副詞節とノニに限っては、準体助詞を介さずに表すことができる。なお、名詞述語の場合は、コピュラは「ジャ」のままで、そこに直接「ニ」がつく。

（45）もう出発の時間ジャニ、まだ来ん。

一方、「ガニ」と「ノニ」は準体助詞を介する形であり、「ガデ」と同じように、標準語の「ノニ」と形式上パラレルである。しかし、「ガジャニ」はそうではない。この「ジャ」がコピュラだとすると、標準語だと「*ノダニ」に相当するわけだが、標準語では不適格な表現である。この「ガジャニ」という形式は、『方言文法全国地図』などの先行研究にも記述がなく、他方言における類似の形式もない。

14）「ノニ」は標準語的、あるいは「上品」というイメージがあり、使うと答えたのは女性がほとんどだった。

15）意味的な違いについては、本誌の「逆接表現」（p.21）で少し触れる。

では、「ガジャニ」の「ジャ」がコピュラだったとして、なぜそのような形式があるのだろうか。ここでは、1 つの仮説として、「ジャニ」を考えてみたい。（45）のように、名詞述語に「ニ」が続く場合、コピュラにそのまま接続して「名詞＋ジャ＋ニ」となる。しかし、これが「名詞＋ジャニ」と再分析され、用言述語の場合は準体助詞「ガ」をつけて名詞化して「用言＋ガ＋ジャニ」となったのではないか。

しかし、この仮説の真偽は、今回の調査のデータからはわからなかった。「ガジャニ」という語形を回答したのは ALM と ANF の 2 人のみで、この 2 人はインフォーマントの中でも比較的若い。このことから、「ガジャニ」は新しい形式ではないかという予想も立てられるが、そのためには中年層や若年層にも調査する必要がある。

以上、西土佐方言におけるノニには、φ準体助詞型のものと準体助詞を介するものがあり、さらに後者にはコピュラと思われる「ジャ」が入った形式があるということを述べた。

5.　まとめ

本稿では、西土佐方言における準体助詞について、調査の結果をまとめてきた。それをまとめると以下のようになる。

表 2 西土佐方言における準体助詞

用法		ガ	ノ	φ
モノ準体	名詞＋ノ	○*	×	×
	用言	○	○	×
コト準体		○	○	△**
ノダ		○	○	×
ノデ		△	×	×
ノニ		○	○	○

○:使える　×:使えない　△:使えるが条件つき

*名詞に直接つくこともできる。

**「するのに便利だ」のような副詞節の場合に限って可能。

これを踏まえて、西土佐方言における準体助詞の特徴をまとめると次のようになる。

(a) 西土佐方言の準体助詞は、「ガ」が用いられる。

(b) 基本的に標準語の「ノ」とパラレルである。

(c) 名詞に後接するモノ準体用法では、準体助詞が名詞に直接つく場合と、属格助詞を介してつく場合とがある。

(d) コト準体用法の一部とノニ用法にφ準体助詞が用いられる。

(e) ノニ用法では、コピュラが入った「ガジャニ」という形式もある。

【参考文献】

上野智子（1992）「高知市および周辺域方言の準体助詞『ガ』」『国語と教育』17，pp.9-16，長

崎大学国語国文学会.
大野小百合（1983）「現代方言における連体格助詞と準体助詞」『日本学報』2，pp.27-66，大阪大学文学部日本学研究室.
大橋勝男（1988）「現代方言に見る準体助詞―特に新潟県新津市古津方言に着目して―」此島正年博士喜寿記念論文集刊行会編『国語語彙語法論叢』pp.595-617，桜楓社.
佐治圭三（1969）「『こと』と『の』―形式名詞と準体助詞（その 1）―」『日本語・日本文化』1，大阪外国語大学留学生別科（佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』pp.181-195，ひつじ書房に再録）.
高木千恵（2002）「大阪方言における断定辞ヤの文末詞的用法について」『阪大社会言語学研究ノート』4，pp.143-152，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
――――（2009）「大阪方言における動詞チガウに由来する諸形式の用法」『国文学』92，pp.83-96（左），関西大学国文学会.
坪本篤朗（1984）「文のなかに文を埋めるときコトとノはどこが違うのか」『国文学　解釈と教材の研究』29-6，pp.87-92，學燈社.
野田春美（1997）『日本語研究叢書 9　「の（だ）」の機能』くろしお出版.
橋本修（1990）「補文標識『の』『こと』の分布に関わる意味規則」『国語学』163，pp.1-12（左），国語学会.
彦坂佳宣（2006a）「『行くダ』などの言い方をする方言群とその性格」『名古屋・方言研究会会報』23，pp.1-11.
――――（2006b）「準体助詞の全国分布とその成立経緯」『日本語の研究』2-4，pp.61-75，日本語学会.
山口堯二（2000）『構文史論考』和泉書院.

のま　じゅんぺい（大阪大学大学院生）
nomajumpei@yahoo.co.jp